

ふくしま 再生 短信

歴史と文化を紡ぐ

永徳さんと歩く



1



佐須小学校 校歌と校章

校歌制定は1966年、体育館落成の年でもある。校章制定は1970年。7年後に閉校になった。校歌と校章が制定されいよいよ村の学びのセンターとして小学校が再生した矢先の出来事であった。農村でも都市でも学校の統合と閉校は今に続いている。規模の利益・経済性追求の流れは止まらない。（上の写真は100年祭記念の校章メダル）



5



4



3



2

【背景写真】佐須小学校の校舎、校庭に向かって大きな校章のプレートが立つ。【カット写真】1. 「福島県相馬郡飯館村立佐須小学校」門柱、寄贈・菅野ヨシイ殿。2. 佐須小学校沿革史年表石碑前に立つ永徳さん、石碑寄贈・久米フミ子氏。3. ケヤキの記念植樹前に「東京慈恵会医科大学疫学研究会記念碑」、疫学研究会部長・部落代表に続いて「保健委員・菅野永徳」の名あり。4. 佐須小体育館で行われてきた農業祭、記念の野球帽は校章のデザイン。5. 校章プレートに見入る永徳さん。

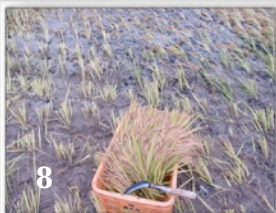
2019年9月22～23日、旧佐須小学校の校舎跡を卒業生の菅野永徳（ながのり）さんと歩いた。旧道から校庭に下る小径には今も洒落たタイル張りの門柱が立つ。佐須小学校の始まりは明治九年（1876年）の「玉野簡易小学校佐須支校」にまで遡る。菅野弥治兵衛氏の屋敷

内の開設。今から143年前、村民の並々ならぬ学びへの熱意が石碑に刻まれている。石碑を寄贈した久米フミ子さんは佐須で33年間教鞭を執り、学校が共同体と一つになっていた時代を象徴している。ケヤキの記念樹が残る医学生との交流は当初大学の研究上の関心か

らのスタートで、10年以上に及ぶ村民の定期検診へと発展し、60名の見学団を東京の医大に送ることもあった。小学校は検診会場であり、村の農業祭の会場でもあった。昭和52年（1977年）、創立百年祭記念式典の年が閉校の年になった。（撮影・文責：若林一平）

ふくしま 再生 短信

2019 / 10 / 12 ~ 13 土石流 宗夫田圃襲う



※ お米一粒たりとも ※



みなさまへ
ただただ「お米一粒たりとも無駄にするな」の気持です。（背景にははざ掛けを終えた収穫米）

2019年10月19日午後、台風19号の被災現場を菅野宗夫さんと歩いた（写真1）。4年前の豪雨による真野川上流氾濫では多数の流木が押し寄せたが今回は台風19号の大雨により大量の土石流が押し寄せ田圃の一部にも流入（中央写真）。幸い宗夫さんの母屋、ふくしま再生の会事

務所、測定小屋および風と土の家はいずれも無事。事務所前（写真2）、測定小屋（写真3）にはいずれも濁流が迫った跡が生々しい。事務所前の村道の被災（写真4と5）により対岸の牧場に至る橋は使用不能。地区の農業用水の取水口設備は無残に崩壊（写真6）。いずれも当面の修復と長期的な対応が必要と宗夫さんは言う。18・19両日、冠水のため倒れた稲は、大永さん・加藤さん・伊井さん・二宮さんらシニア軍団の奮闘により手刈りで回収し、宗夫ハウスに移動（写真7、8、9）。（文責&撮影・若林一平）

ふくしま

再生 短信

9/23 セグラSGRA飯舘村小宮へ



1



6



5



4



3

【写真説明】1.花仙人ことマキバノハナゾノ主人・大久保金一さん（中央）にアヤメ株分けの手ほどきを受けるセグラのみなさん。2.金一さん（中央）の説明に耳を傾ける渥美財団事務局長・角田英一さん（右）。3.アヤメ株分け終了、一同この日のナビゲーター・溝口勝さん（右端）とパチリ。4と5.小宮への途中再生の夢・漆の試験栽培場に立寄り。6.金一さんを囲む午餐は渾身の各国料理満載。

2019年9月23日公益財団法人渥美国際交流財団のセグラ（SGRA、関口グローバル研究会）一行13名のスタディツアー最終日に同行。セグラは海外から日本留学した博士号取得者を中心とする若手研究者集団、渥美国際交流財団の国際交流事業の一環として運営されており、スタディツアーは今回で8回

目。9時風と土の家を出発、この日のナビゲーターは東大大学院教授・溝口勝さん。前田の漆試験栽培場を経て10時半マキバノハナゾノ到着。金一さんの案内でハナゾノ見学の後、アヤメの株分けに全員で挑戦。財団事務局長角田英一さん「現場に行ってみると土に触れ考える、これが基本です」。土に触れ考える、記者もこの言葉を噛みしめながらセグラのみなさんをいつまでも見送った。（文責&撮影・若林一平）

2

2019 11 / 26 第 59 号

ふくしま 再生 短信

認定NPO法人ふくしま再生の会主催・東大大学院農学生命科学研究科農における放射線影響FG共催・渥美国際交流財団SGRA後援
10/20 報告会 原発事故後8年半 被害地の暮らしの今と将来～映像と会話～



※ 明日の実りへ ※

2019年10月20日15時、東大農学部弥生講堂アネックス、第8回総会の後表題のふくしま再生の会第19回活動報告会「原発事故後8年半被害地の暮らしの今と将来～映像と会話～」開催(写真1)。始めに、東大大学院農学生命科学研究科長・農学部長・堤伸浩さん(写真2)、再生の会理事長・田尾陽一さん(写真3)、同副理事長・佐須行政区長・飯館村佐須行政区地域活性化協議会長・菅野宗夫さん(写真4)挨拶。宗夫さん「お蔭様で大水害を乗り越え豊かな実りを実現でき感謝」(写真5)。ふくしま再生の会は新しい生活環境の選択を迫られている村の方々とどのように協働を進めるかを考え続け、課題は多様に複雑になる中、**<第1部>**これまでも継続している各種活動について、特に新しい要素を取り込んでいる状況も含めて報告。各リーダーが映像で紹介。副理事長・東大

学院教授・溝口勝さん「農業再生とICT技術の事業化、東大むら塾若者に期待」(写真6)。ハウス・大永貴規さん「機能性食品だったんそば3年目で150キロ収穫」(写真7)。放射線・小原壮二さん「測定小屋完成稼働、ブドウ栽培前進」(写真8)。分析とまでい・伊井一夫さん「放射能データベースに成果、玄米の放射性セシウムは1Bq/kg以下」(写真9)。健康医療ケア・中町英佐子さん「コミュニティの再生めざしています」(写真10)。**<第2部>**新しい取り組み。田尾さんから現場報告と問題提起。旧佐須小(全景空撮:写真11)の解体進行の最中、風と土の家竣工。アートディレクター・北川フラムさんと村民が囲炉裏端で交流(写真12)。畜産事業家37歳・山田豊さん「大地の芸術祭に感動」(写真13)。宗夫さん「心の分断を超えたい」。18時10分散会。(文責&撮影-5は佐須現地・若林一平)

ふくしま 再生 短信

2019/9/29 二本松・ふくしま農家の夢ワイン収穫祭視察

珠玉の輝き ❖ 夢ワイン ❖

2019年9月29日午前9時半、チームリーダー・小原壮二さん以下総勢7名、総合ワイン事業会社・ふくしま農家の夢ワイン（株）（代表取締役・斎藤誠治さん、福島県二本松市木幡字白石）収穫祭会場到着。まず



は剪定鋏片手にブドウの収穫作業（左写真）。さすが専業農家の

栽培だけあってブドウの房にも威厳あり（右写真）。収穫作業に続いて一同待ちに待つ



た試飲会（左写真）。後で知ったことですが試飲の正しい順はスパークリング→白→赤で要

は口内に残らない順。「夢ワイン」は若い会社、ぶどうの苗木を植え始めたのが2011年。翌12年に

地元のりんごでシードルの製造を開始し、14年に最初のワイン誕生（[会社HP](http://www.fukuyume.co.jp/)：[https://www.fukuyume.co.jp/](http://www.fukuyume.co.jp/)）。事業内容を案内して頂い



一仁（いちじん）

原料は、日本の固有種ヤマブドウとカベルネ・ソーヴィニヨンの交配種である「ヤマ・ソーヴィニヨン」。夢ワイン現地で購入、12月24日開栓。ふくよかな香りがいいです。

たのは夢ワイン取締役販売担当・大野達弘さん（右写真）。地下で熟



成中の古いもので8年、酵母菌は勝沼の人の指導。大野さんは振舞われたピザの釜職人も兼務（左写真）。祭りのイベントには事業の



出発点シードルの原材料林檎絞り体験（右写真）のほかにジャズ



バンドもあり多彩。夢ワインは耕作放棄地の開墾を端緒とするブドウ園に始まる。311の年である。（撮影・文責：若林一平）

飯舘村では・・・

2017年、放射線チームリーダー小原壮二さんはもう一つの凄い事業に着手していた。ワイナリーを目指して宗夫さんとの間で合意が成立。

翌2018年3月には京都天橋立ワイナリー、長野塩尻岩垂ワイナリー視察。同年4



7月、鴻巣高校生宗夫牧場ブドウ園草取りに集合

月、二本松ふくしま農家の夢ワイン視察。9月、山形菊池園芸さんに苗木の打診。12月、北海道池田町ブドウ酒研究所視察。

2019年1月、池田町東さんを佐須に招聘、山形菊池園芸訪問。3月、菊池園芸から苗木搬入・宗夫さん畑に

仮植え。4月、苗木を宗夫さん牧場と佐須菅野芳子さん畑に定植。5月、福島伊達農園からの苗木30本調達定植。



12月、菅野芳子畑で越冬作業